

保育者の「ユーモアの感覚」(1)

橋田重男

1. はじめに

私はこれまで20数年の間、小学校教師として学校現場の教育実践に関わりながら、教育における「ユーモアの感覚」の必要性を述べてきた。しかし、学校現場における理解はあまり得られなかったのが実情である。現在は、保育者養成機関において保育者を目指す学生を指導・支援する立場にある。

学童期につながる幼児期は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な発達段階である。この時期には、ユーモアの発現である、おどけ・ふざけ・からかいなどの行為が見られてくる。そこで今回は、そうしたユーモアの芽生える子どもが日常的に多く関わり、影響が大きいと考えられる保育者の「ユーモアの感覚」について取り上げてみる。

保育現場や保育者養成機関において、教育・保育目標などに「ユーモア」の語句を掲げている所がいくつか見られる。例えば、「いつも明るく、ユーモアのある先生」⁽¹⁾、「自信と勇気、思考力とユーモアのある子を願う」⁽²⁾、「明朗でユーモアに富み、臨機応変に対応できる人」⁽³⁾、「明るくユーモアがあり、自己表現できる学生」⁽⁴⁾、「笑顔がある・ユーモアがある」⁽⁵⁾などである。

しかし、これらは全体の数からすれば比較的少数で、小学校現場と同様に、あまり重要視されていない状況が窺える。しかし、対象が低年齢の保育現場では、ユーモアの活用が効果的に機能する可能性も考えられる。保育者が「ユーモアの感覚」を意識し、身に付けることにより、日常の子どもとのコミュニケーションがスムーズになり、子どもの楽しい気持ちや活気を引き出し、子どもの居場所がある空間を作り出せる可能性があるのではないかと考える。

本稿では、保育者に求められる「ユーモアの感覚」とはどのようなものであるのか、その捉えをもとに、保育者の「ユーモアの感覚」に関連する事柄を取り上げながら述べることにする。但し、まだ研究途上であるため、テーマの検証に向けた基本的な部分を提示するに留まることを断っておく。また、「ユーモアの感覚」のある保育者から小学校教師への継続が幼保・小連携の一助となることへの期待も込めて述べることにする。

2. 教育・保育における「ユーモアの感覚」

一般的な「ユーモアの感覚」の定義としては、それぞれの見地から様々な捉え方があるが、人間同士のコミュニケーションという観点から次のような捉え方を挙げてみる。「自分や他人が愛しているものを笑い、またそれでもそれらを愛することができる能力である」(メレディス)⁽⁶⁾「固定観念や先入観を取り除き、アイデアをひらめかせ、隠された真相や実態を見抜くことのできる一種の知性」(織田正吉)⁽⁷⁾「どんなピンチに陥っても心のゆとりを失わず、事態を冷静に眺め、肩ひじ張らずにさりげなく、それに打ち勝っていける鍛え抜かれた精神と英知を持っていること」(松岡武)⁽⁸⁾などである。

これらをもとに、教育・保育に関わる面で、本稿では「ユーモアの感覚とは、心のゆとりを持ち、事態を冷静にながめ、相手や物事を受け入れられる能力」即ち「ゆとりを持って、事象を受容する能力」と定義することとする。ユーモアには発信という面もあるが、ここではまず受容能力を中心に視点を当てたいと考える。

「ユーモアの感覚」は、弱さを含んだ人間に共感と愛着を覚える感覚であり、自分もそういう失敗をするかもしれないと認めることで人を救う笑いにもつながる。ユーモアの機能によって、つらいことをおかしいことに逆転したり、弱みを笑い飛ばしておかしさに転換してしまったりすることもある。そして、生まれる共感と連帯の笑いによって、子どもの失敗やおかしさなどに共感でき、

子どもの世界に人間的な笑いを広げていける。即ち、笑いでみんなを元気づけることができるのである。

小学校からの『学習指導要領』に該当する『幼稚園教育要領』において、教師の役割として「教師は幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない」を挙げている。また、『保育所保育指針』の保育目標において、「くつろいだ雰囲気の中で子どもの様々な欲求を満たし・・・（以下略）」と表記されている。これらの観点は、子どもとコミュニケーションを図っていく保育者の「ユーモアの感覚」に相通じるものである。

3. 保育者の「ユーモアの感覚」

小学校における「ユーモアの感覚」のある教師の場合では、失敗・間違い・過ちなどの子どもの弱さを人間に共通の弱さとして認め、笑って許してくれる教師に、子どもは人間味を感じ、信頼を寄せる。そういう「ユーモアの感覚」のある教師の下で、子どもは安心して、自分の弱さを見つめることができ、それを乗り越えようとする気持ちを新たにすることができるのである。また、子どもはそうした悪さ・いたずら・逸脱などを分かってくれる教師の姿をよく見ている。

即ち、教師の権威を示すことよりも、リラックスさせる・締め付けない・緩やかにする・（ある意味）いい加減・解放してやるなどをポイントに、子どもの良いところを拾い出して伸ばす・褒めることで子どもの中からもっと豊かなものを引き出すことが重要となる。子どもの発達段階こそ異なるが、保育者においても同様であろう。

しかし、現代社会においてはゆとりがなくなり、苛立ち・ストレスが蓄積したり、みんなが忙しくなっている。何とかゆとりを取り戻せることができれば、人間は寛容になれるし、優しい気持ちを持てる。「ユーモアの感覚」を持った

めには、受容する人の「気持ちのゆとり」が不可欠となる。気持ちにゆとりがあれば、自分自身を客観的に眺めることもできる。また、子どもの声に耳を傾けることができる。幼い幼児に対しても、保育者自身の過ちがあった場合でも、それを認めることができる。また、子どもと一緒に楽しんでしまう「遊び心」も重要である。

保育者の「遊び心」については、保育者という営みが、人と人との関わり合いの中で生み出されるものであるだけに、保育者がどんな雰囲気を持っているかは、子どもの成長にも大きな影響を与える。保育者が暗い雰囲気を持っていたら、そういう表現しかしてこないだろうし、その逆は楽しいものとなるわけである。私たちは「自分を変えられないものだ」とあきらめてしまう前に、明るさやユーモアを資質として持っている人は、よりその幅を広げ、そうでない人は少しでも身につけていけるように努力していく必要がある。保育者が具体的な遊びに関わる際に、必要な明るさや「ユーモアの感覚」は、保育という仕事の性格から導かれる善意によって高められていくのである。あるがままの子どもの姿に共感していけるように、自らの「遊び心」や「子ども心」を覚醒させていくことも必要である。

4. 保育者が関わる子どもの特性

現代社会においては、幼児期に、きょうだいや友だちと十分に交わりながら成長していくことが困難になってきている。ぶつかったりぶつけられたり、いじめたりいじめられたりして、痛さ・悔しさ・辛さを味わいながら、友だち関係や情緒を身にしみて経験することがしにくくなっている。そのために、ちょっと悪いことをして、うまくいかないなと思って反省したり、悩んだり苦しんだりする傾向が見られる。

乳児は、母親の関心を引こうと笑顔などの表情や仕草に表す。一方親は我が子の幸せそうな笑顔を見たり笑い声を聞いたりすることで、幸福感に満たさる。

親ばかりでなく周囲のみんなが和まされる。このように子どもは乳児の段階から、ユーモアに似た信号を周囲に発信して、周囲の人とコミュニケーションを図っている。幼児の段階では、さらにユーモアによって発現する笑いを機能させている。この点について、伊藤他は「幼児は他者との親和的・受容的関係のもとでのコミュニケーションの手段として笑いをを用いている」⁽⁹⁾と述べている。また、原坂は、「幼児の心が快かどうか、安心しきっているかどうかは、その幼児に笑いや笑顔がよく発生しているかどうかで分かる」「ある幼児とある人とで作る時間・空間の中での幼児の笑いの発生の量は、その人がその幼児に与えている緊張感の度合いに比例する」⁽¹⁰⁾と幼児の笑いに着目している。「わらべ」の語源が「笑い部」であるように、子ども達は笑うネタを必死になって見つけている。こどもはいつも笑いたがっているのである。子どもと関わる保育者も自分のおかしさ（人間的愛敬）を、子どもを通して理解できるとも言える。

5. 保育の場面における、保育者の「ユーモアの感覚」に関わる視点

(1) 会話術（バーバルコミュニケーション）

保育活動において、子どもへの「言葉がけ」が重要な要素であることは、従来から言われてきている。子どものある一つの行動に対する保育者の言葉がけによっては、その子どもへの影響は大きく、その後の行動を規制したり、子どもの気持ちも大きく左右したりする。ここでは、保育者と子どもとの関係において、互いに笑いを共有できる関係、即ち双方向のコミュニケーションが成立している状態が必要となる。本学学生の実習先で見かけた事例を2つ取り上げてみる。

<事例1>

子どもが、お絵かきで使っていた水を間違えてこぼしてしまった場面
保育者の対応例

- ①「駄目じゃない。こんなにこぼして。すぐに拭きなさい。」と叱る。
- ②「やっちゃったね。大丈夫だから、すぐぞうきんで拭こうね。」と言って、一緒に拭いてやる。

当然②の方が「ユーモア感覚」のある望ましい対応であるが、保育者に気持ちのゆとりがなければ、つい①のような対応になることも予想される。この対応の違いによって、子どもの気持ちには大きな相違が生まれてしまう。温かい言葉に加えて、一緒に行動してやることも、その子の気持ちのフォローになるであろう。

<事例2>

実習初日に、子どもが実習生に自己紹介をする場面

* 恥ずかしがり、もじもじしてなかなか自己紹介ができない子ども
保育者の対応

- ①「早くしなさい。後回しにするわよ。」
- ②「まだ考えているかな。うまく言えなくてもいいから、後で言ってね。」

②はその子の気持ちを大切にしている「ユーモアの感覚」のある対応である。子どもはこの言葉を聞いて、安心して自分なりの紹介ができるであろう。その後、「頑張って言えたね。良かったよ。」といった評価の言葉が続くであろう。

①はやはり、ゆとりがないために、子どもをせかした言葉になってしまっている。

* 「おなら おなら」とおどけている子ども
保育者の対応

- ①「ふざけないで、ちゃんと言いなさい。」
- ②「におってきそうで嫌な名前だなあ。本当の良い名前を教えてね。」

②では、まず「おなら」の言葉を受け止め、保育者なりのユーモアで切り返している。子どもは受け入れてくれたことを感じ、気持ちを切り替えられることができるであろう。その後、「おなら」絡みのフォローの言葉も期待してしまう。①の対応は、「おなら」の言葉をふざけと取って、否定的な注意にとど

まってしまう。子どもにとっては納得のいかない気持ちを持ってしまおうだろう。

言葉がけにおいては、「何が、どう良かった」のように具体的に、タイミング良く発して、その上で「先生も嬉しかった・感動した・助かった」などの言葉は子どもにとっても嬉しいものである。叱らなければならない時も、ゆとりを持って、さっぱり言って、心に響く、行動そのものを注意、いろいろくっつけないでそのこと一つだけ、人格を否定しないで、などの点を心がけることも必要であろう。

(2) パフォーマンス能力（ノンバーバルコミュニケーション）

子どもは、まず目で見えるものに敏感に反応する。その時、面白さや心地良さを感じ取る。このことはある意味、言葉よりもインパクトがあり、説得力もある場合がある。初めは演技を通して、子どもに問いかけ、疑問を投げかけることもあろう。

究極のパフォーマンスとして、パントマイムを表現することも考えられる。面白い動きを見たり、時には子どもが演じる体験をしたりすることを通して、表現することの楽しさを身をもって知ることにもなるであろう。

(3) 笑顔パワー

保育者にとって、明るさ・前向きさ・包容力などが重要であることは前述の通りである。その現れの象徴に「笑顔（スマイル）」が挙げられる。保育者自らの笑顔の場面、保育者と子ども間の笑顔の交流の場面、子ども同士の笑顔の交流の場面などの場合が考えられる。何れにしても、笑顔を通して「心地良いひととき」を体験し、共有することで、望ましいコミュニケーションが図れるのである。保育者の笑顔の数に、子どもの笑顔の数が比例しているとも言えるのではないか。

(4) 子どものユーモアを引き出す

幼児期のユーモアの発現として、「おどけ」「ふざけ」「からかい」などが見られるようになる。それらを保育者がどのように受け止めるかは、子どもの「ユーモアの感覚」の成長に大きく関わる。そうした言動を注意され、否定される傾向が多く見られるが、できれば、その上に、こうした子どものユーモアの発現を引き出すような関わり方（コミュニケーション）が持てることが望ましい。そのことで、子どもの「ユーモアの感覚」の発達が保障されることに繋がるであろう。

(5) 欧米の園での会話に見られるジョークから学ぶ「ユーモアの感覚」⁽¹¹⁾

親子間や教師と子どもとの間などに、ジョークが日常生活に定着している欧米ならではのものである。おもしろいジョークを仕入れると、夜中でも友人に電話して笑わせる程こだわっているのである。以下に紹介するジョークの中には、立場が悪くなった子どもの方から、ユーモアで切り返しているものもある。即ち、欧米では子どもにユーモアの感覚が育っているのである。また、親には子どもならではの発想を否定しないで、受け入れる心のゆとりがある。

①子どもが新しい服を汚してしまった場面

保育者：まあ、別の服を着せてあげたのに、こんなに汚しちゃって・・・。

子ども：つまづいて水たまりに落ちる前に、服を脱ぐ時間がなかったんだもん。

②チャイムのことを聞く場面

保育者：学校のチャイムは、授業の始めと終わりに鳴るんだよね。

子ども：ちがうよ。

保育者：じゃあ、いつ鳴るの？

子ども：休み時間の始めと終わりに鳴るの。

6. ユーモアをテーマに保育に関わる実践者の紹介

(1) 原坂一郎（元神戸市立葺合保育所保育士）

原坂は、保育者として長期に渡り、保育現場に携わってきた一人である。「幼児の笑い」に着目し、幼児期に発せられる「笑い」の重要性を述べている。その笑いが発生するためには、開放された雰囲気があり、保育者と子どもとの間に信頼関係が必要であることを述べ、「幼児期にこそ笑いを」と主張している。現在は、関西子ども研究所所長として活動を展開している。日本笑い学会理事でもある。

(2) 渡辺雅美（栄養士）

渡辺は、栄養士として、保育現場に関わってきた。栄養バランスのとれた給食メニューを楽しみながら食べる食育指導を進めてきた。楽しく情緒が安定した状態でこそ、栄養もしっかり摂れると述べている。現在は「日の丸料理教室」を立ち上げ、大阪を中心に各地で「親子料理教室」などの講習会を開いている。日本笑い学会理事でもある。

(3) 渡辺光美（元保育士）

渡辺は、保育所と小学校に勤務しながら、幼児・児童のリズム運動に取り組んできた。身体を動かすことの楽しさ・爽快さをみんなで共有することを主張・実践している。現在は、「リズムテコンドー®」を立ち上げ、ユーモアの感覚を生かして、健康安全教育プログラムを、幼児から高齢者を対象に活動している。

7. 保育者養成校における「ユーモアの感覚」に関わるカリキュラム開発の試案

(1) 授業名 保育者の「ユーモアの感覚」

(2) 授業のねらい

「ユーモアの感覚」を理解した上で、保育者として、気持ちのゆとりや遊び心を持ちながら、子どもとコミュニケーションを図ったり、パフォーマンスを発揮したりできるようになる契機とする。

(3) 授業計画

回	授業のテーマ	主な内容
1	ユーモアと笑い	ユーモアの定義とユーモアによる笑い
2	子どものユーモア	ユーモアの発現であるおどけ・ふざけ・からかい
3	ユーモアの感覚	定義とその背景にある気持ちのゆとり・遊び心
4	保育者のユーモアの感覚①	子どもとの心地よいコミュニケーション
5	保育者のユーモアの感覚②	”
6	言葉がけ①	ユーモアの感覚のある言葉がけ
7	言葉がけ②	”
8	傾聴	話を聞いてやること
9	身振り・手振り	ノンバーバルコミュニケーションとスキンシップ
10	事例学習①	保育の場面のビデオから学ぶ
11	事例学習②	”
12	パントマイム	パントマイムの基本
13	パフォーマンス練習	パントマイムを生かした子ども向けシナリオ
14	パフォーマンス発表会	パントマイムを中心にしたグループパフォーマンス
15	まとめ	レポート

(4) 試行授業の概要

①テーマ 保育者の「ユーモアの感覚」

②授業者 橘田重男

③対象 幼児教育学科2年生

④授業案(略案)

教師の活動	学生の活動	備考
<p>1. なりたい保育者像を聞く。</p> <p>2. ユーモアの感覚のある保育者とは、自身がユーモアを発信すると共に、子どものユーモアも受容する。</p> <p>3. 子どもへの「言葉がけ」のケースを取り上げる。 (子どもが実習生に自己紹介する場面)</p> <p>①恥ずかしがり、もじもじして言えない子ども</p> <p>②名前を「おなら」とおどけている子ども</p> <p>・まず子どもを認め(受容し)、自然に言わせる。</p>	<p>・明るく元気な保育者</p> <p>・子どもに好かれる保育者</p> <p>・ユーモアのある保育者</p> <p>・「大丈夫だよ。お名前を覚えてね。」</p> <p>・「おならなんておもしろい名前だね。でも、臭そうで嫌だな。」</p>	<p>・バーバルコミュニケーション</p>

<p>4. 見た目の面白ネタ（パフォーマンス）を取り上げる。</p> <p>①簡単マジック</p> <p>②パフォーマンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「見えない壁」「階段・エスカレーター」 ・子どもを引きつけ、印象付けるネタ 	<ul style="list-style-type: none"> ・マジックを見て楽しむ。 ・やり方を知り、演じる。 <ul style="list-style-type: none"> ・パフォーマンスを見て楽しむ。 ・やり方を知り、演じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ノンバーバルコミュニケーション
<p>5. 「笑顔（スマイル）」を取り上げる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・表情に意識を向け、笑顔を心がける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の表情をチェックする。 ・鏡に向かい笑顔を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スマイルコミュニケーション
<p>6. まとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者にとってのユーモア <p>の感覚とは。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本時を振り返る 	

(5) 授業のまとめ

今回は、盛り沢山の内容だったので、時間的にもじっくり取り組めなかった。試行においても、内容を焦点化する必要があった。カリキュラム全体を調整しながら、さらに内容を検討したい。今回は少人数だったので、個人の声を聞いたり反応を見たりしながら進められたが、大人数の場合は、時間的考慮も予想される。

実習を踏まえた学生の感想は以下のものであった。「実習では、活動を進めていくことだけで手一杯の状態だったので、気持ちのゆとりを持って子どもに関わることは難しかった。ユーモアは必要だと思うので、現場に出てからは意識していきたいと思う。」

8. おわりに

今回の(1)では、保育者の「ユーモアの感覚」をテーマに、基本的な部分をまとめるという概観に留まった。しかし、概観することを通して、保育における「ユーモアの感覚」の必要性を再認識することができた。今後はこの(1)をもとに、保育者と子どものコミュニケーションに焦点を当てながら、できるだけ多くの現場の事例に当たり、分析の上、(2)として保育における「ユーモアの感覚」の機能や効果を検証していきたいと考える。

【注】

- (1) 川崎市宮前幼稚園の保育目標
- (2) 三好桃山幼稚園の運営方針
- (3) 仙台幼児専門学校为学校案内
- (4) 北海道福祉大学校为学校案内
- (5) 第2回保育士さんのためのShaberi-Ba
- (6) イギリスの小説家『ジョーク小噺集』1995
- (7) 『笑いとうーモア』1986
- (8) 『ユーモア教育のすすめ』1987
- (9) 伊藤理絵他「幼児に見られる笑いの分類学的研究」『笑い学研究』日本笑い学会 2007
- (10) 「幼児と笑い」『笑い学研究』1997
- (11) 森宗他貴訳/編『アメリカンジョークに習え』アルファポリス 2002

【参考文献】

- 文部科学省『幼稚園教育要領』教育出版 2008
厚生労働省『保育所保育指針』教育出版 2008
橘田重男『ユーモアの感覚』V2ソリューション 2008
友定啓子『幼児の笑いとう発達』勁草書房 1993

奥田倫子「子どものユーモアに関する研究」『北陸学院短期大学研究紀要』

1997

平井信義・山田まり子『子どものユーモア』創元社 1989

P.E.マッギー著／石川直弘訳『子どものユーモア』誠信書房 1999

佐藤綾子『教師のパフォーマンス学入門』金子書房 1999

江波享子「場の保育論」『保育学研究』第46巻第1号 日本保育学会 2008

榎原禎宏他「教室における笑いの可能性」『山梨大学教育人間科学部紀要』

2004

日本笑い学会編 原坂一郎「幼児と笑い」『笑いの世紀』創元社 2009